

週刊読書人 二〇〇六年回顧

「マスコミ」関係書

(12月22日 二六六八号)

二〇〇六年十一月太平洋をはさみ、日米で歴史に残る二つの事件―米国中間選挙でのブッシュ政権(共和党)の大敗、日本での教育基本法改訂の強行採決―があったという(加藤周一『朝日』十一月二十七日夕刊)。これに防衛庁の「省」昇格の件を加えてもいいのではないか。

九・一一以降の右傾化とナショナリズムの高まりが復元するかどうか疑問だが、山本武利『責任編集』『メディアのなかの「帝国」』(岩波講座「帝国」日本学知第4巻)は多彩な執筆者で、近代メディア(活字・視聴覚・通信)のプロパガンダ性と批判性を歴史的に説明しようとしている。同書は学問編成の系譜の再考のみならず、そこにアジア的視

点があるのが特徴的と言える。

世紀末の湾岸戦争(一九九一年)以降、様々な国際紛争にテレビ、インターネットが直接的に関与し、茶の間にその影響がダイレクトに現れているせいも、あるいは日露戦争から百年「も」経ったからなのか、はたまた第二次大戦から六〇年「も」経たからなのか。ナショナリズムとメディア、戦争とジャーナリズムに注目してみよう。

木村勲『日本海海戦とメディア』(講談社選書メチエ)は知将秋山真之助批判ではあるにしても、メディアが日露戦争をどう伝えたかという点で、長山康生『日露戦争 もうひとつの「物語」』(新潮新書049)や黒岩比佐子『日露戦争 勝利のあとの誤算』(文春新書473)とあわせて読んでみたい。特集をまとめたものであるが、朝日新聞取材班

『戦争責任と追悼(歴史と向き合う1、朝日新聞社)』と読

売新聞戦争責任検証委員会『検証 戦争責任(1)(2)』(中央公論新社)は貴重な歴史証言・資料を数多く含んでいる。米誌『フォーチュン』に描かれた日本観などから考察した高島秀之『嫌われた日本―戦時ジャーナリズムの検証―』(創成社)も含めて、メディアが作り出すイメージが平時と戦時(有事)でどれほど違うのか、流布される社会とメッセージ性の怖さを教えてくれる。そして福岡良明『「反戦」のメディア史―戦後日本における世論と輿論の拮抗―』(世界思想社)は映画と出版メディアに焦点をあて、戦後

かもし出された「反戦」世論の実相を描いている。大石裕・山本信人(編著)『メディア・ナショナリズムのゆくえ』(朝日選書807)は

二〇〇五年に起きた中国の反

日デモを中心として外国メディアが作る日本・日本人イメージを実証的に考察した研究書である。「大本営化するメディア」という副題をつけた浅野健一『戦争報道の犯罪』や佐藤卓己『メディア社会―現代を読み解く視点』(岩波新書)もメディア批判といった側面ばかりでなく、現代社会が抱える諸問題の例示として示唆に富む。さらに国際関係

のなかでのメディア、情報というメッセージ性の多様さについては、橋本晃『国際紛争のメディア学』(青弓社)や江畑謙介『情報と戦争』(NTT出版)にも目を向けたい。さて、一昨年の番組改変事件、職員の不祥事の続発、政治家の関与、受信料の不払いと民事による強制徴収、そして拉致事件からの国際放送への総務省強制命令など、NH

Kをめぐる問題はNHK・朝日・政府といった図式以上に社会的問題として関心が高まった。エリス・クラウス著（村松・後藤訳）『NHK vs. 日本政府』（東洋経済新報社）や星浩・逢坂巖『テレビと政治――国会報道からTVタックルまで』（朝日選書300）がテレビポリティクス時代の理解を高めてくれる。グレッグ・ダイクBBC前会長『真相――イラク報道とBBC』（NHK出版）、有馬哲夫『日本テレビとCIA』などを読むと、ブラウン管から送り出される映像ばかりでないメディア企業の裏側の生々しさが伝わってくるだろう。

出版分野は元気がいい。研究者・実務者が執筆している川井良介（編）『出版メディア入門』（日本評論社）は久々のアカデミックな書である。蔡星慧『出版産業の変遷と書籍

出版流通』（出版メディアパル）は流通面を中心に日本の出版産業の盛衰を体系的にまとめた。館野晰・文ヨソ珠『韓国の出版事情』（出版メディアパル）は韓流ブームの中で、韓国出版メディア事情を紹介している。箕輪成夫『中世ヨーロッパの書物――修道院出版の九〇〇年』（出版ニュース社）は、写本をとおして中世を語り、書物とは何かを探る労作である。

最後に、B・マクネア（小川浩一・赤尾光史監訳）『ジャーナリズムの社会学』（リベラ出版）や伊藤守（編）『テレビニュースの社会学』（世界思想社）、時野谷浩『ニュース普及の研究』（青書房）などはこちらにあげたマスコミの現象をアカデミックな面からの研究書として、またマスコミ産業の概論を平易に解いた、湯浅正敏ほか『メディア産業

論』（有斐閣）をあげる。

鈴木雄雅（すずき・ゆうが）上智大学文学部教授・新聞学専攻）

以下 記事掲載ではないものの、読んでおくべきマスコミ関係書

▼金田信一郎『テレビはなぜ、つまらなくなったのか――スターで綴るメディア興亡史』（日経BP社）

▼藤田真文『ギフト、再配達』（せりか書房）

▼杉山知之『クール・ジャパン 世界が買いたがる日本』（祥伝社）

▼本田周爾『発展と開発のコミュニケーション政策』（武蔵野大学出版会）

▼梅田望夫『ウェブ進化論――本当の大変化はこれから始まる』（ちくま新書582）

▼田村秀『データの罫――世論はこうしてつくられる』（集

英社新書0360B）

▼別府三奈子『ジャーナリズムの起源』（世界思想社）

▼芥間満『匿名報道の記録――あるローカル新聞社の試み』（創風社）二十年前から

全国で唯一匿名報道を行ってきた和歌山の『南海日日新聞社』の記録

▼田島泰彦・斎藤貴男

（編）『超監視社会と自由――共謀罪・顔認証システム・住基ネットを問う』（花伝社）

メディア総合研究所（編）『新スポーツ放送権ビジネス最前線』（花伝社）

▼その他イデオロギー論とは異なる手法で、アジアの戦争を若い読者に視覚的に知らせようとしたものに、別府三奈子『アジアでどんな戦争があったのか』（めこん）がある